第 16 回加藤周一文庫公開講読会
2021 年 10 月 16 日

# 『羊の歌』「高原牧歌」を読む

立命館大学大学院文学研究科　福井優

## I.　概要

・加藤周一（1919～2008）「高原牧歌」『羊の歌――わが回想』岩波新書、1968 年、136～147 頁、改 154～167 頁。初出『朝日ジャーナル』1967 年 2 月 5 日号

・1936 年 4 月～39 年 3 月、第一高等学校理科乙類に在学（17～20 歳）
・「駒場」「戯画」「縮図」：東京での生活／「高原牧歌」：追分での夏期休暇
・7 月（第 1～4 段落）→ 8 月（第 5～11 段落）→ 9 月（第 12～13 段落）
初夏から盛夏、そして晩夏へと移り変わる高原の自然を背景に、①妹久子との共同生活、②そこで出会った人々――主に中野好夫と尾崎行輝――との交流が描かれる

加藤は、中学校最後の夏を信濃追分で過して以来、妹久子と共に毎年そこに滞在するようになった。7 月に加藤と妹は、追分を訪れ粗末な加藤家の別荘で共同生活を送り始める。本章は、これまで中心的に取り扱われていない妹が主題の一つである。聡明で他者に対して寛大な妹は、父信一と母織子、父と加藤との間でしばしば生じる家庭内の対立を緩和し、加藤家を背後で支える存在だった。加藤と妹は、性格を異にするものの、多く点で価値観は共有しており、信頼し合う間柄であった。また追分での共同生活も加藤ではなく妹が主導していた。

8 月になると、追分には避暑や学業を目的に、多くの人々が訪れ賑わい出す。加藤もその時期、知識人や学生を中心とする様々な人々と交流を持った。この高原での人々との出会いも本章の主題である。中野好夫も追分で交流を持った一人であり、加藤は中野の並外れた知力・体力とその優れた語学力に舌を巻く。また尾崎咢堂の息子である行輝とその家族とも出会い、共にテニスに興じるなど親しく付き合うことになった。加藤は、人付き合いを避け高原に隠棲し、反時代的な生活を送る行輝に好意を持ち、彼らと過ごすひと時に、光に満ち溢れた夏のよろこびを感じる。そして戦後、加藤は行輝に再会するのだが、時代は変わろうとも行輝は何も変わっていなかった。

8 月末になると、避暑客や学生たちは追分を去り、9 月には加藤と妹だけとなった。二人だけとなった高原で、加藤は自身が妹を深く愛していることを確認する。そして、二人もまた東京へと帰ってゆくのである。

II.　解説

**第 1 段落　加藤と追分**

高原の夏は、郭公の声と共にはじまる。中学校の最後の夏の年を、信州の追分村で過してから後、私は毎年の七月にその声を聞くようになった。浅間山麓のから松のなかで、その声は遠くまた近く、澄んだ空気をふるわせ、かえって周囲の自然の静寂をひきたたせた。東京の騒音は俄かに遠く、私は林の中の小さな家に着いた瞬間から、汗と埃にまみれた合宿練習や、渋谷駅の雑踏や、美竹町の家の西陽のさす二階の部屋を忘れた。そこには郭公の声と共に、芝と火山灰の小径があり、青空のなかで微風にそよぐ白樺の梢があり、雑木林の間を縫って流れ来り流れ去る霧があり、また浅間の刻々に変る肌と、遠く西の地平線を限る紫の八ヶ岳があった。そこでは群青の空が深く、真昼の入道雲が壮大で、夜空の星は鮮かであった。七月の末まで避暑の人々はほとんどあらわれず、近所にあった学生の夏期寮も閉じたままで、八月には忙しくなる油屋や、夏の間貸しをする村の農家も、まだ客を迎えていなかった。演奏会のはじまるまえに管弦楽団が楽器の調子を合わせるあのざわめきのように、私は郭公の声を聞きながら、やがて村が東京から集って来る人々でにぎやかになるのを待っていた。〔傍点は福井、以下も同様〕（136～137 頁、改 154～155 頁）

1)「中学校の最後の夏の年を、信州の追分村で過してから後、私は毎年の七月にその声を聞くようになった」

・加藤は 1935 年に、初めて信州浅間山麓の追分村（現在の長野県北佐久郡軽井沢町追分）に逗留した。以降加藤は亡くなるまで、夏季を追分で過ごすことを習慣とした。本章は、主に第一高等学校在学時（1936～39）に、追分に滞在した際の経験が綴られる

・追分は「反抗の兆」（100～104 頁、改 114～118 頁）にも登場。また加藤は、2001～03 年にかけて、「高原好日――20 世紀の思い出から」を『信濃毎日新聞』で連載

2)「自然の静寂」（追分）⇔「東京の騒音」

・加藤にとって追分（「高原牧歌」）は、第一高等学校在学中の寮生活を中心とする東京（「駒場」「戯画」「縮図」）とは全く異なる、もう一つの空間

・加藤は、情景描写の際に「聴覚」「視覚」「嗅覚」「触覚」に関わる事柄を畳みかけるように叙述する特徴がある。ここでも「郭公の声」「群青の空」「紫の八ヶ岳」などの言葉を重ね、初夏の追分の自然を描写[1]。本章は全編にわたり、刻々と微妙に変化する夏の追分の自然を、美しく描き出す（特に晩夏を描く第 12 段落）

→追分での生活によって、自然に対する豊かな感受性を養う

**第 2 段落　追分での妹久子との共同生活**

[1] 鷲巣力『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか――『羊の歌』を読みなおす』岩波書店、2018 年、81～82 頁。

追分の家は、中仙道から浅間へ向って少し入った林のなかにあり、眺望はよかったが、ガスも、水道もなく、井戸もなかった。知り合いの農家の主人に頼んで、近くの寺の井戸から水を桶ではこび上げてもらい、炊事のためには、七輪に薪と炭で火をおこしていた。その生活は、都会の物好きな人々が山野に天幕を張ってキャムピングと称するものに似ていたのであろう。父は夏の間東京の医業を捨てておくわけにゆかず、母は酷暑の東京に父だけを長くおき去りにすることを望まなかったから、夏休みの大部分をそこで過したのは、妹と私である。（137 頁、改 155～156 頁）

1）「追分の家」

・「医者である父親が患者である風間〔道太郎〕さんから、加藤の高校受験勉強に最適の場所として、油屋を推薦され、そしてそのために夏休みを妹と一緒に過したのが縁となって、加藤家も追分に避暑用の小屋を持つに至った」[2]

・両親は東京に留まり、加藤と妹久子のみが追分に滞在することになったのは、「経済的理由」（101 頁、改 114 頁）による。そのため「追分の家」も別荘とはいえ、必要最低限の住宅設備だったと思われ、そこでの生活は「キャムピング」とあまり変わらなかったようだ。加藤と妹は毎年そこで、7～9 月にかけて細やかな共同生活を営んだ

**第 3 段落　妹久子の人物像**

私の妹はその頃雙葉高等女学校を卒業して、家事を手伝っていた。それは昔母の通った学校であり、母はそこでカトリック教徒になった。妹がそうならなかったのは、学校の方が昔の特徴を失っていたからかもしれない。母の頃には、同級生が母自身を含めて四人しかいなかった。その教育に当った外国の尼僧たちとの関係が、親密であったのは当然だろう。妹が通いだしたときには、学校の規模が大きくなっていて、教師と生徒との関係は、他の学校の場合とちがわなかった。妹たちと尼僧との接触は少かった。宗教教育は限られ、職業教育は行わず、また上級学校への準備教育にも熱心ではなかった。女学校は、「良家の娘」を結婚のために準備することを、目的としていたのである。「良家の娘」が結婚のために何を必要とするかは、もはや基督教とは全く無関係に、日本の中産階級が定義していた。その趣味と一般的な教養は、子供の教育に役立ち、行儀の良さと「人から好かれる性格」は、交際に役立ち、家事の能力は、大日本帝国の有能な官僚や技術者をして後顧の憂なからしむるものでなければならなかった。〔……〕妹は卒業式から帰って来て、同級生たちが学校との別れを惜しんでみんな泣いたといった。「馬鹿なものだな」と、その話を聞いて、父はいった。「おまえも泣いたのか」「そうね、みんなが泣くと涙が出て来るわ。……感傷をたのしむのでしょうね、あまり悲しくもないけれど」――妹は決して馬鹿なのではなかった。それどころか自分自身を冷静に眺めることができるという点では、父よりも上であったかもしれない。そ

[2] 中村真一郎『火の山の物語――わが回想の軽井沢』筑摩書房、1988 年。加藤「高原好日（2）風間道太郎」『加藤周一自選集 10　1999-2008』岩波書店、2010 年、228 頁。

の頃、他人との交際を嫌うことの極端になっていた父と、本来賑かなつき合いを好んでいた母との間には、不和といわぬまでも、絶えず意見のくいちがいがあった。また文芸の逸事に凝って学業に不熱心な私と、息子に対して全く別の期待をかけていたであろう父との間に、しばしば激論の戦わされることがあった。それにも拘らず東京の家の空気が暗くもなく、険しくもなかったのは、妹がそこにいたからであり、妹にはそこにいるというだけで、なごやかな空気をつくりだす一種の能力が備わっていたからだろうと思う。他人についての彼女の判断は、しばしば手きびしく、鋭かった。はじめて会った私の友だちの話を傍で黙って聞いていた後で、「どこまで本当かしら。話をおもしろくする人なのね」と妹はいったが、それは、そこに到達するまでに私が長く手まどった結論であった。しかしたとえ辛辣な批判をもっていたときでも、妹がそれを相手への攻撃という形で表現することはほとんどなかった。母もまた人の「気持ち」には敏感であった。しかし自分自身の「気持ち」に対しても敏感であり、しばしばみずから信じるところに従って争いを辞さなかった。ひとり妹だけは、争いを好まず、人と人との関係を勝ち負けとしてみるということが決してなかったのである。私と父に到っては、理くつ屋にすぎず、相手の「気持ち」を彼女たちの十分の一も理解していなかったにちがいない。（137～139 頁、改 156～158 頁）

1）妹久子について

・妹久子は、母の母校であるカトリック系の雙葉高等女学校に進学。久子がカトリック教徒にならなかった理由は、母が通っていた頃とは異なり、学校での外国の尼僧との接触も少なく、宗教教育も限定されていたためと加藤は推測する（後に入信している）

・卒業後、家事を手伝っていた「妹はいくさのはじまった頃に結婚し、二児を得ていたが、夫は中国の戦線にいて、いつ帰るのかわからなかった」（212 頁、改 240 頁）

2)「女学校は、「良家の娘」を結婚のために準備することを、目的としていたのである。「良家の娘」が結婚のために何を必要とするかは、もはや基督教とは全く無関係に、日本の中産階級が定義していた」

1899 年の高等女学校令以来、高等女学校教育の基本方針は、「良妻賢母主義」であり[3]、それはキリスト教系の女学校においても例外ではかった（キリスト教に代表される西洋思想の近代日本における摂取の不徹底さ及び変質という問題も含意か）

3）妹久子の性格を、加藤自身及び両親と比較しながら叙述

①妹は「自分自身を冷静に眺めることができるという点では、父よりも上であった」

②「他人についての彼女の判断は、しばしば手きびしく、鋭かった」。ある友人に対して妹が下した評価は的確で、それは「そこに到達するまでに私が長く手まどった結論」

③「相手の「気持ち」」への十分な配慮。「母もまた人の「気持ち」には敏感であった。しかし自分自身の「気持ち」に対しても敏感であり、しばしばみずから信じるところに従

[3] 小山静子「高等女学校教育と良妻賢母観」『京都大学教育学部紀要』27 号、1981 年。

って争いを辞さなかった。ひとり妹だけは、争いを好まず、人と人との関係を勝ち負けとしてみるということが決してなかった」。このような妹と母に対して、他者の「気持ち」を全く理解しようとしない、「理くつ屋」の加藤と父

→妹久子は、父母や加藤と比べても、とりわけ聡明で他者に対して思いやりのある人物として描かれている。家族内での妹の優位性を強調

4）家族内の対立と妹久子

①父信一と母織子（「祖父の家」「渋谷金王町」「美竹町の家」も参照）

「他人との交際を嫌うことの極端になっていた父」対「賑かなつき合いを好んでいた母」

→背景に、地方出身、武士・農民的、質実剛健な父⇔都市出身、町人的、ハイカラな母

②加藤と父信一（「反抗の兆」も参照）

「文芸の逸事に凝って学業に不熱心な私」対「息子に対して全く別の期待をかけていたであろう父」→東京帝大の文学部を志望する加藤⇔工学部への進学を希望する父[4]

→加藤家の内部にしばしば生じた不和や亀裂が深刻化しなかったのは、「なごやかな空気をつくりだす一種の能力」を持った妹の存在による。加藤家を背後で支えているのは妹

・小説「悪夢」（1947）：父と母の激しい喧嘩に耐え兼ね、家を出ようと決心し階段を降りる「僕」は、「妹」が「階段の下にたつて、不気味なほど大きな眼を見開き、幽霊のやうにぢつと僕を見つめてゐることに気がついた」[5]

**第 4 段落　加藤と妹久子との関係**

たしかに私と妹とは、ほとんどあらゆる点で、性格を異にしていた。私は勝負事を好み、妹は好まなかった。私は他人に狷介で、妹は寛大だった。私は多くの人々から憎まれたり嫌われたりしていたが、妹はおそらく誰からも憎まれなかったろうし、嫌われることも少なかったのであろう。しかしまた私たちは、実に多くの点で、好悪を等しくしていた。同じ食物を好み、同じ旋律を愛し、同じ自然をたのしみ、同じ人物に好意をもち、同じ人物を批判していた。世間での経験はどちらにもなかった。またどういう絶対的な権威をも信ぜず、道徳的には保守的で、東京の山手の言葉を話し、「良家」の慣習を破らず、妹には男友だちがなかったし、私には女ともだちがなかった。林の中の家に二人だけで暮していた間、私と妹とはよい友だちのようで、お互いに争うということが一度もなかった。私は妹のなかに、優しい心使いのすべて、陽気な笑い声と楽天主義、また私に対する信頼とあたたかさを、見出していた。しかしそういうことは、時としておこる小さな争いや不和を決して排除するものではないだろう。そういうことがなかったのは、妹にほとんど無制限の寛大さがあったからである。追分の家で、何ごとかを決めるのは、いつも私であった。私にそうさせることで、夏

[4] 鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』63、480～481 頁。

[5] 加藤「悪夢」『人間小説集』鎌倉文庫、1947 年、62～63 頁。鷲巣前掲『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』62～65 頁。

の生活をほんとうに導いていたのは、妹であった。（139～140 頁、改 158～159 頁）

1）加藤と妹との間の親密な関係

・加藤と妹は「ほとんどあらゆる点で、性格を異にしていた」一方で、「実に多くの点で、好悪を等しくしていた」。加藤と妹は、共通の「好悪」＝価値判断を有する

・「私は妹のなかに、優しい心使いのすべて、陽気な笑い声と楽天主義、また私に対する信頼とあたたかさを、見出していた。〔……〕妹にはほとんど無制限の寛大さがあった」→時に手厳しい人物評価を下す加藤（特に父や叔父、教師たち）には珍しく、妹に対しては手放しの評価を与えている

・対照的な父と母、そして両親に従順な兄妹の慎ましい生活→加藤の一家は、1920 年代に都市部で形成された、新中間層の性別役割分担家族に近い。核家族であるこのような家庭では、教育では「母性愛」が強調され、子供たちは「童心主義」を内面化するよう育てられた[6]。このような家庭環境では、兄妹の関係はより密着した、プラトニックなものとなっただろう

**第 5 段落　「高原」での出会い①：中野好夫**

八月のはじめには、東京から、学生や教師やその他の避暑の人々が集ってきた。彼らは、火事の後で中仙道の反対側に建てなおされた油屋に泊り、また少しはなれた「本陣」にも、部屋を借りて住んだ。また多くの農家が夏場だけの部屋を貸していた。農家といっても、信越線の開通する前に中仙道の宿場として栄えた頃の屋号と建物を保存していたから、人を泊めるのには好都合にできていた。機を見るに敏な寺の和尚も、境内に長屋をつくり、一列にならべた部屋に、学生を一人ずつ泊めて、庫裡で食事まで供していた。東京帝国大学英文学科の中野好夫助教授が、ある年の夏、泊っていたのは、その寺の一部屋である。私はその頃中野さんを知らなかったが、寺に同宿していた学生から、噂を聞いた。「かれは英文学科で抜群によく出来る人だ」とその学生はいった。今スウィフトの翻訳をしている。庫裡の食事のときには学生と気楽に話す、気のおけない人だが、勉強ぶりは超人的である、体力もまた超人的で、何里もある軽井沢のゴルフ・コースまで歩いて行き、一周りしてから、また歩いて帰って来る。学生が小学校の庭で野球をすれば、出て来て大活躍をする、その後で、学生たちが飲んで休んでいるとき、一風呂浴びると仕事をはじめて深更に及ぶ、とてもあのまねはできない……私はおどろき呆れてその話を聞いていたが、まもなく、駅のそばの庭球場で、そのほとんど伝説的な人物に出会うことになったのである。私たちは宿場から半里に余る道を歩いて、そこまで軟式の庭球をたのしみに出かけていた。人数が四人に余れば、残りの人々は木蔭に腰をおろして勝負が終るのを待つ。その待っている間に本を読んでいたの

[6] 小野沢あかね「戦間期の家族と女性」『岩波講座 日本歴史 第 17 巻 近現代 3』岩波書店、2014 年、111～116 頁。大門正克『増補版 民衆の教育経験――戦前・戦中の子どもたち』岩波現代文庫、2019 年、4 章。

が中野さんであった。「宿場からここまでの道も本を読みながら歩いて来たのだ」とまた学生がいった。その本は、今私は題名を忘れてしまったが、分厚な英国の小説であった。「なに大して面白いものではない」と中野さんは無造作にいった。私はそれまで、外国の本を字引と相談しながら途方もない時間をかけて読むものと心得ていたから、それほど気軽に小説を読みとばす人がいるということに、全くおどろいた。なるほどそういうこともできるものか、現にそうしている人がいる以上、そこまで行かなければ、外国文学の話をするのにも不足ということか、と私はあらためてそのときに考えた。しかしそう考えただけで、実際に外国の小説を気軽に読めるようになるまでには、その後長い時間がかかった。(140～142 頁、改 159～160 頁)

1)「火事の後で中仙道の反対側に建てなおされた油屋」

油屋旧脇本陣は、1937 年 11 月に焼失し、翌年に再建された。この火災が起きた時に、加藤と交流のあった堀辰雄や立原道造は油屋に宿泊していた（104 頁、改 117 頁）[7]

2）英文学者・評論家、中野好夫（1903～85）

・1935 年に東京帝国大学文学部助教授、48 年には教授となる。英文学を専攻し、シェイクスピア、スウィフト、モームらの翻訳・研究で知られる。また戦後は、幅ひろい視野から社会批評も展開し、憲法擁護・反安保・反核・沖縄返還などの革新運動を牽引した。代表作に『アラビアのロレンス』『蘆花徳富健次郎』など（『日本人名大辞典』）

・中野は「庫裡の食事のときには学生と気楽に話す、気のおけない人だが、勉強ぶりは超人的である、体力もまた超人的」である「伝説的な人物」。「外国の本を字引と相談しながら途方もない時間をかけて読」んでいた一高生の加藤は、「気軽に〔外国の〕小説を読みとばす」中野に対して、驚倒すると共に敬意の念を抱いた

・中野との交流は、加藤が東京帝国大学医学部入学後も続いた。中野は仏文学者の渡辺一夫教授と親しく[8]、加藤を含め仏文研究室の面々が集った喫茶店「白十字」にも出入りしていた（183 頁、改 207 頁）

3）加藤の中野評→「転向」に着目

・加藤は、木下順二と共に『中野好夫集』全 11 巻（筑摩書房、1984～85 年）を編集

・「中野好夫の政治的な立場は、一九四五年の敗戦を境として二分されていた〔……〕一度国が戦争を始めた以上国民の一人として傍観ではなく出来るかぎりの協力をすべきだ、という意見であった。〔……〕戦後の中野さんは、このような戦中の主張を自己批判して、政府と市民、支配者と被支配者の区別を明確にし、一連の重要な社会政治的争

[7] 「年譜」『堀辰雄〈ちくま日本文学全集〉』筑摩書房、1992 年、472 頁。

[8] 加藤「高原好日（1）中野好夫」前掲『加藤周一自選集 10』133 頁。

点について常に市民の側に立った。／自己批判を通しての立場の「転向」は内心の問題である。その点において誠実かつ徹底的であったからこそ、いわゆる「戦後転向」はなく、その社会に対する態度は見事に一貫し、逆風に屈しない一本の巨木のように聳えたのである」[9]

**第 6 段落　「高原」での出会い②：尾崎行輝**（～第 10 段落）

| |
|---|
| その頃信濃追分の駅のちかくには、尾崎咢堂の長子、尾崎行輝氏が、家族と共に、「穴居生活」をしていた。尾崎氏は、林のなかに浅いたて穴を掘り、そこに浅間の焼石とセメントを混ぜてつくった八角形の家を建て、井戸を屋内に備え、薪を家の周囲に積み、一年中そこで暮して東京へ出ることがなかった。信州北佐久の冬は、厳しい。しかし主人公は、「穴のなかに住むと存外暖かいものですな」とうそぶいていた。それは必ずしも、炊事の任に当っていた夫人の意見ではなかったろう。また小学校まで半里以上の道を通っていた双生児の男の子や、また一日に何本もない信越本線で岩村田の中学校まで出かけていた長男には、別の意見があったかもしれない。私の妹とおよそ同じ年ごろの娘だけは、東京で暮していて、夏休みの間だけ両親のもとへ帰ってきていた。「冬の間はめったに人の顔もみません。そんなことが一週間位つづくのは、普通のことですよ」と夫人はいった。「人の代りに熊に出会うのじゃありませんか」「いや、出会うことはめったにないが」と尾崎氏はいった、「この家の周りにも足跡をみることがある、冬になると山に食べ物がなくなるので、里へ出て来るのです。雪のなかの大きな足跡は、狐などとちがって、すぐにわかりますな」。（142 頁、改 160～161 頁） |

1）「尾崎咢堂の長子、尾崎行輝氏」（1888～1964）

・飛行士、政治家。「憲政の神様」尾崎行雄の正確には四男。ライト兄弟に憧れ、京都帝国大学を中退し民間パイロットとなる。1915 年に帝国飛行協会航空局技師。1917 年に自ら設計した飛行機が不時着し、以後父の秘書を務める。1947 年に参議院議員に当選（緑風会）。日本航空の創設に尽くし、1951 年には取締役に就任（『日本人名大辞典』）

・尾崎行輝一家の家族構成[10]：三男一女

---

[9] 同前、133 頁。また中野については、「戦争と知識人」（『加藤周一著作集 7　近代日本の文明史的位置』平凡社、1979 年、初出 1959 年、303～304、306 頁）、「戦後文学史上、思想史上の記念碑」（鷲巣力編『加藤周一著作集 18　近代日本の文学者の型』平凡社、2010 年、初出 1983 年）、「『中野好夫』再読」（『加藤周一自選集 7　1984–1986』岩波書店、2010 年、初出 1985 年）、「中野好夫の生きかた」（鷲巣編前掲『加藤周一著作集 18』初出 1996 年）も参照。

[10] 木村弘樹「市民協働による尾崎咢堂関係資料の整理・活用について」『相模原市立博物館研究報告』27 号、2019 年、43 頁、「第 1 図　尾崎咢堂関係系図」。

「夫人」＝節子
東京で暮らす「娘」＝美知子（長女）
岩村田の中学校に通う「長男」＝行光
小学生の「双生児の男の子」＝行宏（次男）、行良（三男）

2)「八角形の家」

・「行輝さんの一家は、信濃追分の駅に近い雑木林のなかで、六角形の家に住んでいた。その家は半ばタテ穴建築で、大きな屋根の廂と地表との間が狭く、火山岩を積み固めた厚い壁に二重窓が開いていた。内部は広い一部屋で、そこに暖炉や安楽椅子や、食卓があり、中二階に家族六人の寝室が割りあてられていた」[11]

・この家の形について、「O〔尾崎行輝〕氏に関するノート」（『青春ノート V』1939 年 6～9 月）では「六角形」とも「八角形」とも書かれており[12]、実際どちらであったかは不明。後年「うろ覚えに六角形の家のあたりを探してみたこともあるが、その跡さえも見つけることができなかった。あの六角形の家は、ほんとうにあったのだろうか。快活な発明家とその家族の牧歌（idyll）は、どこに行ってしまったのだろうか」と加藤は述べている[13]

・加藤は、冬でも「穴のなかに住むと存外暖かい」と述べる尾崎行輝に対し、「夫人の意見ではなかったろう」、息子たちは「別の意見があったかもしれない」と推測。追分での「穴居生活」は、行輝の独断専行であり、他の家族にとって本意ではなかったろう

**第 7 段落　尾崎行輝の「穴居生活」**

尾崎氏がどうして山にひきこもり、そういう隠者に似た生活を営むようになったのか私は知らない。「この土地が好きでしてね、都会は煩しくていけない……」――しかし「都会が煩しい」ということの内容は、人によってちがうだろう。八角形の家の主人公は決して人嫌いではなかった。むしろ逆に、追分へ集ってきた学生たちをわけへだてなく歓迎した。話し好きで、陽気で、そこには長い冬籠りから解放された夏のよろこびがあふれていた。しかし軽井沢の夏の別荘のあった軽井沢、また相馬子爵と結婚した異母妹やおそらくは他の親類縁者も住んでいたろう隣の軽井沢まで出かけてゆくことは少かった。また向うから尾崎氏を追分へ訪ねて来ることも稀だったようである。軽井沢は東京の夏の出店であり、東京は、世捨人に似た主人公にとって、面倒な親類附き合いを意味していたのかもしれない。若い時に尾崎氏がしていたことは、その頃輸入されたばかりの飛行機を操縦して、「日本では最初

[11] 加藤「高原好日（1）尾崎行輝」前掲『加藤周一自選集 10』129～130 頁。
[12] 加藤「O 氏に関するノート」鷲巣力・半田侑子編『加藤周一青春ノート　1937–1942』人文書院、2019 年、98 頁。
[13] 加藤前掲「高原好日（1）尾崎行輝」131 頁。

の民間飛行士」になることであった。八角形の家に住んでから尾崎氏がしていたことは――当人の説明によれば、「発明」をすることであった。人里離れた山中に籠り、雪に閉じこめられて、他の何をすることができたろうか。私が知り合った頃には、「日本全国で年に何トンもの茶を節約することになる」茶器の「発明」にとりかかっていた。「これは国家経済という面からみても、大きなことですよ」と尾崎氏はいった。それは一九三〇年代の末で、日本経済がまっしぐらに戦時体制をつくりあげようとしているときであった。（142～143 頁、改 161～162 頁）

1）尾崎行輝の人物像

①「隠者」「世捨人」、「浮世離れ」（144 頁、改 163 頁）→現実の社会、またその支配的価値観から外れた、その風変わりな人柄に加藤は好感を持つ

②「追分へ集ってきた学生たちをわけへだてなく歓迎した。話し好きで、陽気」、「快活で、話し好き」（145 頁、改 164 頁）→中野好夫と共通する性情。加藤は、彼らに明朗で誰とでも対等に接する、精神の開放性を見出す

・一方で、『青春ノートⅤ』には「O 氏は社交的で人づきあいがよい」「寛大である」[14]としつつも、「O 氏等はブルジョアのお坊っちゃんたちである。教養があって、芸術を愛好し、お嬢さんと遊ぶのが上手で、その上ダンスの得意な O 氏等に欠けているのは生活の不安だけである。つまり世の中で一番厭なものだけである。こう云う連中には敵わない。だから私はこう云う連中が大きらいである」[15]と述べており、一高生の加藤は、あまりにも貴族的で華やかな尾崎家の人々に、引け目を感じていたようだ。しかし『羊の歌』（『高原好日』）には、当時尾崎一家に抱いたこの違和感については触れられない

2)「咢堂の夏の別荘のあった軽井沢、また相馬子爵と結婚した異母妹やおそらくは他の親類縁者」

・尾崎行雄には先妻繁との間に、長男行至、次男彦麿、三男行衛、四男行輝、長女清香の子供があり、後妻英（テオドラ）との間に、次女品江、三女雪香がある。また雪香は子爵・相馬恵胤と結婚している[16]

・尾崎行雄は、軽井沢の別荘「莫哀山荘」に、毎年 5 月頃から 10、11 月まで滞在し、「一番早く来て一番遅く帰る軽井沢の主」と呼ばれた。軽井沢では家族と共に、趣味の乗馬や狩猟を楽しみ、「テオドラ夫人を始め令息行輝氏、品江、雪香の両令嬢等のスッキリした乗馬姿は軽井沢の避暑地風景を一際引立てた」という[17]

3)「若い時に尾崎氏がしていたことは、その頃輸入されたばかりの飛行機を操縦して、「日本では最初の民間飛行士」になることであった」

---

[14] 加藤前掲「O 氏に関するノート」97 頁。

[15] 加藤「人物記」鷲巣・半田前掲編『加藤周一青春ノート』105 頁。

[16] 木村前掲「市民協働による尾崎咢堂関係資料の整理・活用について」。

[17] 伊佐秀雄『尾崎行雄傳』尾崎行雄傳刊行會、1951 年、22 頁。

ライト兄弟による世界初の有人動力付飛行の成功が日本に伝えられたのは、およそ 4 年後の 1907 年である。この知らせに触発された尾崎行輝は、父親を説得し、1915 年に帝国飛行協会（現在の日本航空協会）の第 1 期生として飛行訓練を受けた。同年卒業飛行に成功し、「晴れて正規に訓練を受けた民間パイロット第 1 号」となった[18]

4）尾崎行輝の「発明」

「これは国家経済という面からみても、大きなことですよ」と言いつつ、全く戦時経済に貢献しそうにない「茶器」の「発明」に熱中する尾崎行輝と、1930 年代末の「日本経済がまっしぐらに戦時体制をつくりあげようとしているとき」を対比。「総力戦体制」が構築されつつあるなか、東京から離れた追分で反時代的な生活を送る行輝

**第 8 段落　尾崎家の人々とのテニス**

尾崎氏は、また軟式庭球にも凝っていた。みずからその技に長じていたばかりでなく、子供たちにも庭球を教え、長男はすでに岩村田の中学校で、庭球部の主将をしていた。彼は私の好敵手だった。追分の庭球部の学生の常連のなかには、後に外交官になった機智縦横の井川氏や、また後に毎日新聞社の経済部に入り「エコノミスト」の編集長になった山本進君もいた。私たちは庭球の順番を待っている間に駄弁を弄し、決して話題に事欠くことがなかった。眼のまえではまぶしい夏の午後の光のなかで、尾崎氏の娘の洋服の裾がひるがえり、私の妹の笑声が高くひびき、打球の音がつづいていた。私には尾崎家の人々がただそののどかな午後のために生きていたようにさえ思われる。あの妖精のような娘、浮世離れのした父、球を追うことに生真面目に集中していた息子たち……おそらく彼ら自身にとっても最上の時に、そしてその時にだけ私は彼らに出会ったのである。汗ばんだ肌に快い木陰のさわやかな西風と共に、遠く青い空にたちのぼる浅間の煙と共に、また近づきつつあった嵐のまえの山村に置き忘れられたひとときの平和と共に。雷雨が突然やって来ると、私たちは大いそぎで道具をかたづけ、火山灰の坂をかけのぼり、尾崎氏の八角形の家へとびこんだ。そこには、濡れた身体をかわかすのに薪の暖炉があり、疲れを癒すのにあたたかい紅茶があった。突然来り、忽ち去る叩きつけるような豪雨、稲光り、落雷の音――それさえも私たちには高原のたのしみのなかの一つの要素であった。それはまだほんとうの嵐ではなかった。（143～144 頁、改 162～163 頁）

1）「追分の庭球部の学生の常連」

・「鉄道の駅の前には駅員のためのテニスコートがあった。駅員はほとんど使っていなかったが、尾崎さんは三（ママ）〔四〕人の子供を連れてしばしばそのコートにあらわれた。夏の

[18] 徳田忠成「逓信省航空局　航空機乗員養成所物語（2）　民間パイロットの萌芽」2007 年、http://www.aero.or.jp/web-koku-to-bunka/2007.2.15youseijo2.htm（最終閲覧日 2021 年 10 月 14 日）。

晴れた日の午後には追分の宿から、自転車か徒歩で何人かの学生たちも加わった。客好きで、開放的で、快活な人柄の尾崎さんを中心として、おのずからそこに、若者たちのなごやかに、くつろいだ「サークル」が出来上がっていた」[19]

・尾崎行輝を中心とする学生たちの「サークル」には、加藤や後に毎日新聞の記者となる山本進の他、建築家の大江宏も加わっていた[20]。また「外交官になった機智縦横の井川氏」は、井川克一のことか（井川は 1917 年に生まれ、41 年に外務省に入省、42 年から 3 年半フランスに留学する。戦後は 1951～54 年にかけて、在仏日本国大使館に一等書記官として勤務し、60 年にモントリオール総領事、79 年に駐仏大使となる[21]）

→戦前の追分は、戦後に評論家、ジャーナリスト、官僚、建築家として活躍することになる、知識人予備軍の学生たちの横断的な交流の場だった。戦後において加藤が、様々な領域の知性との人的ネットワークを築く基盤の一つに追分があるといえる（⇔近代日本において、知識人の間に知的共同体は形成されなかった[22]）

2）尾崎家の人々とのテニスが意味するもの

・テニスの試合の様子を、「まぶしい夏の午後の光」「洋服の裾がひるがえり」「笑声が高くひびき、打球の音」「汗ばんだ肌に快い木陰のさわやかな西風」「遠く青い空にたちのぼる浅間の煙」といった言葉を重ねることにより、鮮やかに生き生きと印象的に描写

・「尾崎家の人々がただそののどかな午後のために生きていた」「彼ら自身にとっても最上の時に、そしてその時にだけ私は彼らに出会った」「また近づきつつあった嵐のまえの山村に置き忘れられたひとときの平和」→彼らとのテニスは、加藤にとって、自身や尾崎家の人々を襲う「嵐」（「いくさ」を暗示）の前の、束の間の穏やかで幸福な時間

**第 9 段落　尾崎一家の戦時下の生活**

太平洋のいくさがおこったときに、尾崎氏の娘は追分の学生のひとりと結婚して、伊豆へ去り、再び姿をみせることがなかった。それを残念に思う理由は私にないはずだったが、私はそのことで一つの夢が永久に消え去ったような気がした。やがて追分の駅の庭球場が、野

---

[19] 加藤前掲「高原好日（1）尾崎行輝」130 頁。

[20] 同前、131 頁。

[21] 『第三十三版　人事興信録　上』人事興信所、1985 年、い 9 頁。加藤は、井川について以下のように、その印象を語っている。油屋の「客の大部分は、私が初めて訪ねた三〇年代には、高等文官試験の準備に専念していた大学生たちである。その中には後に外交官となり、モントリオールやパリで再開した井川大使も含まれていて、機知に富み、口が悪く、活気にあふれ、中学生の私にも親切だった」（加藤「高原好日（1）油屋主人」前掲『加藤周一自選集 10』124 頁）。

[22] 丸山眞男「近代日本の知識人」『丸山眞男集　第十巻』岩波書店、1996 年、初出 1977 年。

菜畑になった頃、双児の少年は、成長して飛行機に乗り、長男は召集されてどこかの戦場に送られていた。尾崎氏は夫人と「穴居生活」をつづけ、人の噂によれば、いち早く「疎開」した相馬子爵は、浅間高原に野生のぶどうをあつめて、ジャムをつくっていた。いくさがいよいよ激しくなると、私はもはや尾崎氏に会うことも少くなった。（144～145 頁、改 163～164 頁）

1)「太平洋のいくさがおこったときに、尾崎氏の娘は追分の学生のひとりと結婚して、伊豆へ去り、再び姿をみせることがなかった。それを残念に思う理由は私にないはずだったが、私はそのことで一つの夢が永久に消え去ったような気がした」

・加藤は尾崎行輝の長女美知子に好意を抱いていたことを匂わせている。『青春ノートＶ』には「私はその夏中彼女に会う度に美しいと思い、彼女の話を人がする度には、子供だと云って無関心な風をした。無関心な風をしながら、つまらないことをしていると考え、又一方つまるとかつまらないとか自分のポーズを反省することに馬鹿馬鹿しさも感じた。所がその馬鹿々々しいと云う感じのなかに彼女があらわれ、美しい姿をしていて、お前はつまらない男だと囁きはじめるのには、私も可なり参った」と吐露している[23]

・密かに恋していた娘は結婚し、庭球場が野菜畑に変わり、尾崎行輝との交流も途絶えがちになる→「いくさ」により、追分の夢のようなひと時が次第に失われていく様を表現

2)「双児の少年は、成長して飛行機に乗り、長男は召集されてどこかの戦場に送られていた」

・長男行光は、弘前高等学校文科に在学していたが、1943 年に海軍予備学生に志願し、海軍航空隊に入隊

・双子の行宏・行良は、二人揃って正則中学校を中退し、1941 年に逓信省印旛地方航空機乗員養成所に入り、その後大日本航空から徴用され、軍用機の試験飛行や前線輸送を担当した[24]

**第 10 段落　加藤にとっての尾崎行輝**

十数年ぶりで再び尾崎氏に会ったのは、いくさが終り、その後しばらく経ってからである。尾崎氏は逗子の丘の上に住んでいた。双児の、嘗ての少年のひとりは、今旅客機を操縦して、海外航空路を飛んでいるのだ、という話を私はそのときに聞いた。他の二人の息子たちについては、尾崎氏も触れず、私も訊ねなかった。尾崎氏自身は相変らず快活で、話し好きで、その意味では少しも変っていなかった。そして軟式庭球の代りに、今度は「洋弓」に凝っていた。「健康にもいい、誰にもできる、やってみるとなかなか面白いですな……」。航空機、軟式庭球、洋弓、そして「穴居生活」と「発明」――日本の議会民主主義のために生

[23] 加藤前掲「O 氏に関するノート」101 頁。

[24] 以上は「父鷲・子鷲　天晴れ・大空の双生児　長男は海鷲、先手打たれた尾崎老」（『朝日新聞』1943 年 9 月 16 日付朝刊）、「人　尾崎行良」（『朝日新聞』1963 年 4 月 9 日付朝刊）に基づく。

涯孤軍奮闘した人の息子は、さすがに他人のしないことをやってきた、と私はそのときに思った。それが他人にも役立つだろうという素朴で美しくはかない信念をいつまでも失わずに。（145 頁、改 164～165 頁）

1）「尾崎氏は逗子の丘の上に住んでいた」

逗子にあった尾崎家の別宅は「風雲閣」。行輝も当時そこに住んでいたと思われる[25]

2）「双児の、嘗ての少年のひとりは、今旅客機を操縦して、海外航空路を飛んでいるのだ、という話を私はそのときに聞いた。他の二人の息子たちについては、尾崎氏も触れず、私も訊ねなかった」

長男と双子の一人の戦死を匂わす表現となっているが、実際は、長男行光は戦後、読売新聞の記者となっている。また双子のうち、行良は日本航空のパイロットとなったが、行宏は戦時中、戦闘機を上海に移送する途中に墜落し死亡した[26]

3）戦後も「洋弓」に凝る尾崎行輝は、「少しも変っていなかった」

・行輝のこれまでの「航空機、軟式庭球、洋弓、そして「穴居生活」と「発明」」と、咢堂の「日本の議会民主主義のために」尽くした生涯とを関連付ける

・追分の山中に隠棲し、一風変わった生活を送る行輝は、「いくさ」へと滔々と向かう日本社会からも孤立している。しかしそこには、反時代的な精神が息づいている

・「東京には政府の宣伝と御用文士、学者のうるさい声が満ち溢れていた。しかし夏の高原には鳴き交わす郭公の声と共に友人たちの静かな理性の呟きがあった。もちろんそれは無力な呟きにすぎなかったろう」[27]

**第 11 段落　追分と軽井沢**

追分に暮していた間に、私はまたときどき、小諸や軽井沢へも出かけた。それは東京の代用品だった。小諸には田舎町があり、軽井沢には横文字の看板をかかげた小さな商店街があって、外国人と、金もちと、金もちのまねをしたい人たちとが、右往左往していた。そこで見ず知らずの人の群のなかに自分を投じることを私は好んでいたが、それは追分村ではできないことであった。また軽井沢の駅から「旧道」まで走っていた軽便鉄道には、遊園地の電車のような一種の愛嬌があったし、小諸から追分まで坂を喘ぎながら昇る信越線の汽車の窓に、刻々と変る浅間の山容は、私をひきつけて倦ませなかった。（145～146 頁、改 164～165 頁）

1）追分と小諸・軽井沢を対比的に表現

小諸や軽井沢も様々な人々が「右往左往」する、「東京の代用品」（「軽井沢は東京の夏の出店」143 頁、改 162 頁）である。加藤は、しばしば「そこで見ず知らずの人の群のなか

[25] 伊佐前掲『尾崎行雄傳』1127 頁。

[26] 前掲「人　尾崎行良」。

[27] 加藤「高原好日（1）前口上」前掲『加藤周一自選集 10』122 頁。

に自分を投じることを」好んだ。それは人里離れた追分では決してできない→東京、あるいはその代用品のような場所から隔絶された、追分という土地の特殊性を強調

**第 12 段落　夏の終わりと妹への愛**

私と妹とは、九月半ばに私の学校がはじまるまで、追分の家に暮していた。八月末の避暑地からは、潮が引くように人々が去ってゆく。窓を釘附けにされた別荘がふえ、八月の間樹かげに見えていた女学校の寮の灯も消える。学生たちの唱歌の声は絶え、村の宿屋も、農家も、ひっそり静まりかえる。東京へ帰る知人を駅まで送ってゆくと、数日まえまで賑かだった庭球場はさびれて、人影もなく、短くなった日の西陽に、駅の囲いの木の柵がながい影をひいている。夕焼の空のなかに舞う赤とんぼに、私たちがはじめて気がつくのは、そういうときであった。「もう秋ね」と妹はいった。「さようなら、あまりに短かかりしわれらが夏のきらめきよ」という句を私は想い出し、妹はもう東京へかえりたいと思っているのかもしれないと考えた。しかしすすきの穂が私たちの背よりも高く伸び、夕方の風が俄かに肌寒くなり、夏のまさに終ろうとするときに、高原はもっとも微妙なものにみちていた。私と妹は、恋人たちのように、寄添いながら、人気ない野原に秋草の咲き乱れるのをみ、澄み切った空気のなかで、浅間の肌が、実に微妙な色調のあらゆる変化を示すのを見た。夜になると遠い谷間の方から坂にさしかかった蒸気機関車の喘ぎはじめるのが聞え、坂をのぼりきったときに変る音、駅にとまるときの車輪の軋みまでが、静まりかえった夜を通して、はっきりと聞えてきた。その汽車のなかの人々と、私たちとを隔てていた途方もなく広い空間のなかで、眼をさましていたのは、私たち二人だけであったかもしれない。もし私がこの世の中でひとりでないとすれば、それは妹がいるからだ、と私はそのときに思った。私は高原のすべてを愛していたが、それ以上に、妹を愛していたのだ。（146～147 頁、改 165～166 頁）

1)「私と妹とは、九月半ばに私の学校がはじまるまで、追分の家に暮していた。八月末の避暑地からは、潮が引くように人々が去ってゆく」
第 1 段落と同じく、加藤の鋭い美的感受性に基づく風景描写によって、季節の変わり目を巧みに表現。ここにも「美竹町の家」（91～93 頁、改 103～105 頁）で印象的な、加藤が愛する「夕焼」の光景が登場する

2)「「さようなら、あまりに短かかりしわれらが夏のきらめきよ」という句」
ボードレール「秋の歌」:「われらやがて、冷たき闇に沈み入らん、／おお、さらば、左様なら、短きに過ぎし、われらが夏の、生気ある輝きよ！／われすでに聞く、窓外の敷石に、／さびしき響して下ろさるる、薪木を。〔……〕」[28]

3）東京の喧騒から隔絶された追分は、夏が終わりを告げることによって、さらに人けがなくなり、そこは加藤と妹との二人だけの世界となる
・「私と妹は、恋人たちのように、寄添いながら〔……〕もし私がこの世の中でひとりで

[28] 堀口大學訳『ボードレール詩集』新潮文庫、2008 年、77 頁。

ないとすれば、それは妹がいるからだ、と私はそのときに思った。私は高原のすべてを愛していたが、それ以上に、妹を愛していたのだ」

・第 4 段落では、「私と妹とはよい友だちのよう」（140 頁、改 158 頁）と表現したのに対し、ここでは二人の関係性を「恋人」と例える。恋愛感情を含んだ、より親密な関係性を表す言葉に→加藤の妹に対する愛は、極めて深いものだった

・海老坂武：「並々ならぬ愛の告白ではないか。それを近親相姦的感情と言うべきか否か、私にはわからないが、サルトルの場合がそうであったように、加藤周一の場合も、それ以後の女性たちとの交わりに、この感情が影響を及ぼしているかもしれない」[29]

**第 13 段落　追分から東京へ**

私たちは東京の家へ帰ると、その翌日から、毎日、活動写真を見たり、演奏会へ行ったり、また格別の目的がなくても、街のなかへ出かけた。「帰ってきたかと思うと、またすぐに出かけてばかりいるのね」と母はいった。しかし妹はなぜ私が出かけたがるのかをよく知っていたし、私は彼女が知っているということを知っていた。私たちは追分の夏の結論をひきださねばならなかったのであり、それは東京を何度でもあらためて発見するということであった。雨の舗道に映る銀座の灯、喫茶店の曇った硝子窓、南風がはこんで来るかすかな海の香り、公会堂から日比谷交差点までの煉瓦の道、耳のなかに残っている聞いたばかりの音楽の後味、そして実に多くの人々の実に多くの顔……その多くの顔は、決して毎年の秋に同じではなかった。あるときには落着いていたし、あるときには焦立っていた、あるときには懐しく、あるときには救い難く愚劣にみえた。しかし彼らが陰惨にみえたことは一度もない。追分から帰って東京を再発見するこの私の習慣は、十年以上もつづいて戦後に及んだ。遂にその習慣の途絶えたとき、私は東京を再発見するために、もっと遠い所から帰ってくるようになっていた。（147 頁、改 166～167 頁）

1）「追分から帰って東京を再発見する」

・『羊の歌』では、章末の文章は直接的・具体的な表現は避けられ、曖昧な何かを象徴するように書かれる傾向があり、ここもその一つと思われる。加藤と妹だけが知る「追分の夏の結論」とは何か？また、「追分の夏の結論」を出すことと、「東京を何度でもあらためて発見するということ」はどのようにつながるのか？

・追分から帰ってくる度に、東京の街並みやそこに住む人々は、違って見えた。住み慣れた場所とは全く異なった環境や文化の土地を訪れることによって、見慣れているはずの東京の景色は、一変し新しい意味を帯びて立ち現れる（加藤にとっての「旅」の重要性）。いずれ加藤は、追分よりも「もっと遠い所」（1951～55 年のフランス留学）から東京へ帰ってくることにより、東京（日本文化）を「再発見」するようになる

[29] 海老坂武『加藤周一 ――二十世紀を問う』岩波新書、2013 年、150 頁。